大阪市立今津中学校 50th　３年学年通信　令和３年(2021)　02.05.　No.55

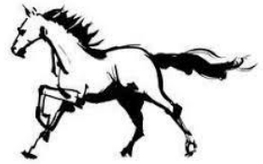
我ら 50 期　ここにあり

鬼を考える③

　ご存知、昔ばなしの「桃太郎」には鬼が出てきますが、実は、鬼ヶ島の鬼は温羅（うら）という人物がモデルになっています。彼は百済で起きた戦を逃れ、吉備に渡ってきた渡来人の長でした。温羅は吉備の人々のため、たたら（製鉄）や造船、製塩などの技術を伝授し、人々に慕われ吉備国の王になったそうです。一方では英雄として伝えられる温羅ですが、別の伝承では、吉備一帯を支配する暴君だったともされています。吉備の民を救うべく、桃太郎のモデルである吉備津彦命が派遣され、激闘の末に退治されてしまうのです。どちらの伝承が事実に近いのかわかりませんが、岡山ではいまでも温羅と吉備津彦命が共に大切に祀られています。この話を知った日から、私にとって鬼ヶ島の鬼は「鬼」ではなくなったのです。昔からよく疑問に思っていました。鬼と呼ばれる人々。彼らはなぜ人の心を捨てたのだろうか。いいえ、人は人の心を捨てて鬼になるのではありません。他人の心を理解することをやめた時、私たちはその誰かを鬼にしてしまうのです。

勉強するノートに思考を書き留める

　文字として残さないと、今、あなたが考えていることは、永久に闇に葬りさられる運命にあります。その時々の思いを勉強ノートに形として残しましょう。時系列的に、その時々に思いついたことを書き記しましょう。なぜなら、脳はあなたの人生に起こったどんな些細な出来事でも、エピソード記憶としてとても正確に覚えているからです。勉強ノートには以下の５つの要素を盛り込みましょう。①日々のゴール、②勉強の御褒美、③体調管理について、④欠点や失敗したこと、⑤その時々に考えていること。常に優先順位を確認しながら、勉強を阻害する無駄な作業をしないようにして、自分の中から湧き出す感情も味方にして、本当の意味での実力を伸ばしましょう！



「達人」とその弟子（上）

　昔々、戦国時代のお話です。塚原ト伝（ぼくでん）という剣術の達人がいました。あるとき、ト伝の弟子の一人が、道端につながれた馬の後ろを通り過ぎようとしました。すると突然、馬が脚を跳ね上がます。弟子はひらりと身をかわして、これをよけました。「なんと素早い身のこなし」「さすが、武芸の修行をしているものは違うなぁ」周りで見ていた人たちは、口々にこの弟子を褒めたてました。ところが師匠であるト伝だけは、弟子をほめなかったのです。みんなの賞賛を受けて得意になっていた弟子は、そんな師匠の反応が面白くありません。そのとき、こんなことを思いつきました。“師匠自身の身のこなしは、どんなものだろうか。・・・よし、ちょっと試してみようじゃないか”弟子はト伝が通る道に先回りして、そこにわざわざ馬をつないでおきました。すると・・・

面接の受け答えに困ったときの対処法

　いくら準備をしても、面接では答えを言い間違えたり、質問がよく聞き取れなかったりといったハプニングが起きるもの。でも、そんなときにも慌てずに落ち着いて、率直で前向きな態度で対処しよう。

言い間違えてしまったとき

　言い間違いをすると、しまったという気持ちが出てしまい、つい頭をかいたりしがちですが、それをしないように。慌てずに素直に、「間違えました」と言ってから言い直せば大丈夫。

答えが思い浮かばないとき

　できるだけ答える努力はするべきだが、あまり長い間黙ったままでいるのは印象がよくないので、どうしても答えが思い浮かばないときは、正直に、「わかりません」「知りません」と言おう。適当なことを言うと、面接官は見抜いてしまうので注意しよう。

グループ面接で言おうと思っていたことを他の人に先に言われたとき

　同じだからといって、慌てて意見を変える必要はない。「私も同じです」と答えればいい。ただし、それだけではそっけないので、具体的な例をあげたり、答えの理由を述べたり、自分なりの意見も一言加えるといい。